

# 第8回国際サンゴ礁 シンポジウム（パナマ） 見聞録

下池 和幸  
阿嘉島臨海研究所

Report on the 8th International Coral Reef Symposium, Panama City

K. Shimoike

1996年6月24日から29日の日程で、中米のパナマで開催された第8回国際サンゴ礁シンポジウムに、保坂理事長、大森教授らと共に参加してきました。日本からパナマへの直行便はなく、成田からシアトルで乗り継いでマイアミで一泊し、2日かかりでパナマに到着しました。パナマ共和国の国土は日本の約5分の1で、大半が熱帯雨林です。有名なパナマ運河は、東西に細長い国土の中央を南北にはしっています。首都のパナマシティは南岸の太平洋に面しますが、近代的な高層ビルが林立し、派手なペイントを施したバスが行き交う活気に満ちた都市で、公用語はスペイン語です。地元の客で賑わうパナマ料理のレストランはとにかく安く、サンコーチャー（タロイモのスープ）が特に美味しかったです。

サンゴ礁研究が世界的に注目されているためか、シンポジウム参加者数は前回（4年前）のグアム大会のおよそ3倍にあたる千数百名に上りました。しかし、日本からの参加者は前回の約半分の25名でした。発表テーマ数も前回の2倍近くに増え、15の基調講演と140のポスターセッションのほか、710の一般講演が11の会場に分かれて行われました。そのカテゴリーはサンゴの生殖、サンゴの遺伝学、サンゴ礁の炭素循環、サンゴ礁管理、海藻、海綿、魚類生態、水産増養殖など67もの多岐にわたりましたが、中でも、サンゴ礁のモニタリング技術、サンゴ礁の環境保護などに関するテーマが増え、サンゴ礁保全に対する気運の高まりを感じました。私もサンゴ礁保全を目的として、長年研究を続けてきた「阿嘉島におけるサンゴ食貝（シロレイシガイダマシとヒメシロレイシガイダマシ）の成長と成熟」についてポスターセッションで発表しましたが、同じ研究テーマを持つ数名の研究者からの反響があり、



ポスターセッション会場にて

交流が持てたことが特に大きな収穫でした。会場の雰囲気は賑やかで活気があり、ロビーではコーヒーを片手に、あちらこちらで和やかに談笑する光景が見られました。また会場の一角では、地元住民を対象としたサンゴ礁保全などについての展示やワークショップが催されるなど、研究者だけの祭典ではなく、一般に対する啓蒙活動としての、国際シンポジウムが果たすべき役割は大きいと感じました。

今回の旅行では、ツアーも楽しみました。パナマシティからコンピューター機でパナマの大西洋岸に点在するサンブラス諸島を訪れたのですが、細かい刺繍を施したクナ族の女性の民族衣装（モラ）がとても綺麗で印象的でした。そして、島の昼食ではいきなりイセエビが出てきて驚いたのですが、周囲のラグーンを泳ぐと、そのイセエビや大きなウニがごろごろしており、かつての沖縄の豊かなサンゴ礁を見るようでした。太平洋と大西洋は太古の昔に隔離されたため、生物相が大きく異なります。サンゴ群集は慶良間諸島とは比べものにならないくらい貧弱なものでしたが、初めて見るカリブ海の特異なサンゴや生物たちに感激し、日が暮れるまで泳ぎ回りました。